中

作

Ж

0 小すら時に 世の凡ての何ぞはかなき。 に悲歌を嘆ず、 永 む 劫 0 時を の流れの尽きざるに、

彼の寮を思ひ浮なりという。 の寮を思ひ浮べて心静かに

別言

離り

の歌

を奏でん。

高遠を誇る自治寮よ

逝きて帰らぬ春風を 春秋ここに二十六

恨む今宵の若草 これ先人が夢の跡かな 一の 上へ

星永遠に流 れ ては

光がる 強く正しく友よ生きなむっょ ただ 瞳は幸福星か

立くは誰た

吾に友あり、明日の宿居は

吾れっぱ

は知り

らね

ども

手折りて結ぶた 原始の森に咲く の森に咲く ゆ る生命のかがり火に りて結ぶ友垣がともがき の森に咲く枝を そ

尽きぬ名残の涙する 誓ふ心の酒杯に 降る苦難をともにせん

今宵限りのこの宴かな